

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月19日現在

機関番号：36301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520618

研究課題名（和文） 学習意欲に働きかける学習方法の与え方に関する研究

研究課題名（英文） A study of factors influencing Japanese university students' willingness to learn and preference for English learning methods.

研究代表者

池上 真人 (IKEGAMI MASATO)

松山大学・経営学部・准教授

研究者番号：60420759

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、学習者に自学習を薦める際に、何に基づいて学習方法を提示するならば、彼らの学習意欲に働きかけ「やりたい」と思わせることができるかを明らかにすることである。調査はインタビュー調査とアンケート調査によって行われ、以下のような主な研究結果を得ることができた。(1) 学習者は学習方法を大別すると「学習内容に関する要因」と「学習環境・習慣に関する要因」とによって判断しており、その判断が学習意欲に影響を及ぼしている。(2) 学習方法に対する学習意欲は主に「役立ちそう」と「やれそう」という気持ちによって決定付けられている。(3) 学習志向などの違いによって、2つの気持ちの学習意欲への影響が異なる。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed to investigate the factors affecting Japanese university students' willingness to learn an English learning method. The study included one qualitative and two quantitative surveys. Analysis of the data revealed three main results: (1) Students select the learning method that they want to follow on the basis of two main factors—namely, learning environment and habits and learning content. (2) Their willingness to learn is determined by two main assessments: usefulness and continuance of learning. (3) The two assessments affect the willingness to learn differently, based on the students' learning orientations.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、学習方法

1. 研究開始当初の背景

「先生、どうやって勉強すれば英語ができるようになりますか？」英語教師であれば、誰もがこのような質問を受けたことがあるだろう。英語習得のためには授業外の学習は欠かせない要素であり、また自らの学習のやり方が確立されていない基礎段階の英語学習者にとっては、学習方法やそのやり方に関する教師のアドバイスは非常に重要である。そのため、多くの英語教師にとって、学習者にどのように英語の学習方法を薦めればよいかという問題は、しばしば直面する重要な問題であると言える。実際にこのような質問を受けた場合、多くの教師は自分が実践してきた学習方法や効果があると考えられる学習方法を薦めているのではないかと考えられる。しかしながら、アドバイスを受けた学習者の中には、提示された学習方法にやる気を示すものがある一方で、求めている学習方法とは違うという顔をするものもある。つまり、全く同じ学習方法を提示しても、それをやりたいと思う学習者もいればやりたくないと思う学習者もいるのである。このように学習者によって異なる反応が示されるのは、個々の性格も英語力も学習動機も異なっているため当然のことであると考えられるが、「やりたい」あるいは「やりたくない」と判断しているということは、何か彼らの中に内的な基準があり、それらを基に判断しているのではないかと考えられるのである。では彼らは何を基準に学習方法を「やりたい」あるいは「やりたくない」と判断しているのだろうか。言い換えるならば、教師は学習者の何に注目すれば、学習者が学習意欲を持って取り組めるような学習方法を適切にアドバイスができるのであろうか。このような疑問に答えるために、学習者の内的基準を明らかにしたいというのが本研究の出発点である。

2. 研究の目的

本研究に先だって行われた一連の研究により、いくつかの事がすでに明らかになっている。それらの研究で明らかになっている点は、学習者の学習意欲を左右する要因として、学習方法が、コミュニケーション型かどうか、学習内容に興味を持てるか、学習に対する負荷が高いか、があり、学習者の学習目標や自己評価によって、それらの要因が学習意欲に異なった影響を与えること、またある学習方法に対する学習意欲を高めるためには、その学習方法を継続できると感じさせることが重要であること、などである。しかしながら、これらの研究は、限られた学習者を対象としているなど事例研究の域を出ることができなかった。そのため、これらの研究成果を踏まえ、本研究では、より様々な属性の学習者

を対象に、どのような学習者にどのような学習方法を薦めれば、学習意欲が高まり、学習の効果が最大限に発揮されるのかについて(1)学習方法、(2)学習者の属性、(3)教師の役割、の3つの観点から調査を行い、体系的に明らかにすることを目的とした。

本研究が研究期間内に明らかにしようとしたのは以下の4点である。

- (1) 様々な学習方法に含まれるどのような要因が学習意欲に影響を及ぼしているのかを明らかにする。
- (2) 学習者の属性が、学習方法に対する意欲にどのように関係しているのかについて明らかにする。
- (3) 教師のどのような働きかけが、学習方法に対する意欲を高める、あるいは持続させるのかを明らかにする。
- (4) 学習者の属性、学習方法などにそれぞれに含まれる要因が互いにどのように影響し合い、またそれぞれが学習意欲にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では3度の調査が行われた。第1調査はインタビュー調査、第2調査はアンケート調査、第3調査では予備的調査としてインタビュー調査が行われ、その後アンケート調査が実施された。

- (1) 第1調査は、大学生2~4年生14名を対象に実施されたインタビュー調査である。インタビュー調査にあたっては、まず調査参加者の属性を把握するために、英語力に対する自己評価、英語への意識、英語学習の目標を問う質問紙調査を行った。また調査参加者に、4技能別に複数の英語学習方法を提示し、それぞれについて「やりたい」と思う学習方法と「やりたくない」と思う学習方法を選択してもらい、それぞれの学習方法について、なぜ「やりたい」あるいは「やりたくない」と感じたのかについての説明を求めた。
- (2) 第2調査では、大学生1~4年生96名を対象に、リスニングとスピーキングに関するアンケート調査を行った。質問紙には、学習者の属性に関する項目として、(1)学習志向に関する項目、(2)英語学習に対する意識に関する項目を設けた。学習志向に関する項目はKolb(1984)のELT(Experiential Learning Theory)を基にした藤田(2002)の学習スタイルに関する項目の中から26項目を選択し、修正したものを用いた。英語学習の意識に関する項目では、2つの技能それぞれに対して「好きか」「得意か」「必要か」「できるようになりたいか」「勉強したい気持ちはどのくらいか」といった学習に対する意識に関する6項目を設定した。また学習方法に対してどのような認知的評価がされるのかを調べる

ためにスピーキングとリスニングの2技能を対象に複数の学習方法を提示し(表1)、それぞれの学習方法に対して、「やりたいと思うか」「楽しそうだと思うか」「役立つと思うか」「自分にとって意味があるか」「面倒くさいか」「難しそうか」「続けられそうか」など7つの質問項目を設けた。各項目はすべて5件法で回答を求めた。データ収集後、学習者の属性ごとに学習意欲と認知的評価や英語学習に対する意識がどのように関係しているのかを因子分析、重回帰分析、相関、t検定などの統計処理によって分析した。なお、本調査は当初62名のデータで分析を行ったが、追加で34名のデータを得ることができたため、最終的に96名のデータによって分析を行った。

表1 提示された学習方法

リスニング	CD付問題集をする 洋楽を聴く 映画やドラマを英語で観る ニュースを英語で聴く 英語学習番組を視聴する 英語の音声聞き流す
スピーキング	音読をする 会話表現を覚える 英会話番組を視聴する 英会話活動に参加する

(3) 第3調査では、まず予備的調査としてインタビュー調査が実施された。調査対象者は大学生2~3年生13名で、それぞれに対して学習志向に関する質問項目、学習方法に関する質問項目についての質問紙調査を行い、それぞれの項目と学習方法に対する「やりたい」「やりたくない」がどのように関係するのか、また教員の働きかけがどのように学習意欲に影響を及ぼすのかの聞き取りが行われ、その結果をもとにアンケート調査のための質問紙が作成された。アンケート調査では、スピーキングとリスニングの2技能を対象に、それぞれ対照的な2つの学習方法を提示して行われた。提示された学習方法はスピーキングが「音読や会話表現の暗記」「課外の英会話活動に参加」、リスニングが「CD付問題集」「映画やドラマ、インタビューなどの視聴」である。

アンケート調査の調査参加者は大学1年生104名であった。アンケートには、学習志向に関して10項目(「実践と学習」「効果と興味」「他者からの評価」「計画性」「教師への期待」各2項目ずつ)、英語学習に対する意識に関して6項目(「好きか」「自信があるか」「自己評価と他者評価に差を感じるか」「できるようになりたいか」「必要か」「勉強したいか」)、学習方法に関する認知的評価そ

れぞれ3項目(「どのくらいやりたいか」「どのくらいやれそうか」「どのくらい役立つそうか」)、教師の関わり方に関する項目(「教師にどのように関わってほしいか」と教師の関わり後の学習方法に関する認知的評価それぞれ3項目が設定された。各項目はすべて5件法で回答を求めた。アンケート実施後は、それぞれt検定、相関などによって、学習志向がどのように学習意欲と認知的評価の関係に影響を及ぼしているのかを統計的に分析した。

4. 研究成果

一連の調査によって得られ主な結果は以下の通りである。

(1) 第1調査の結果、学習者は学習方法をいくつかの要因から判断しており、それらの学習者の学習意欲に影響する要因は「学習内容に関する要因」と「学習環境・習慣に関する要因」の2つに大別できることが示唆された。学習方法をリスニング、リーディングの受容技能とスピーキング、ライティングの発表技能に分けて、それぞれの要因についてまとめると、受容技能における「学習内容に関する要因」には、「興味関心の有無」「学習効果」「難易度(理解容易度)」があり、「学習環境・習慣に関する要因」には、「慣れ、習慣のなさ」「教材選択の難しさ」「面倒さ」「継続の難しさ」など「やりやすさ」という概念でまとめられる要因が示された。また、発表技能においては、「学習内容に関する要因」としては「達成感」と「不安感」があり、それらのバランスがやりたい学習方法を決めていることが示唆された。「達成感」とは、スピーキングやライティングのような発表技能においては「伝わった」「できた」と思える気持ちであり、「不安感」とは、「評価される不安」「伝わらない不安」「正しいかどうかの不安」である。発表技能における「学習環境・習慣に関する要因」は受容技能と同様に「やりやすさ」で表すことのできる要因が示された。表2に結果をまとめる。

2つの大きな要因のうち「学習環境・習慣に関する要因」については、教師の係わる余地が大きいと考えられる。実際、調査の中でも、例えば、「先生がまずはこれを試してみたら良いよってしてくれたらいいかなあ」「これ聴いてごらんって渡されれば聴くかも」「量が少なくて、定期的にテストとかわしてくれるならするかも」「授業で配付されたりすればできると思う」というように、教師の係わりを求めるコメントがいくつもあった。そのため、依存的な面もあるが、学習の初期段階であれば、教師が最初に計画表などを示して学習のリズムを作ったり、ある程度教材を提供することで、学習意欲に働きかけることができるのではないかと考えられる。

表2 それぞれの要因のまとめ

学習内容に関する要因
<受容技能>
○興味・関心 興味・好き・楽しさ、興味のなさ、つまらなさ
○効果 役立ち度、役立たなさ
○難易度（理解容易度） 理解の容易さ、解答の有無、難しさ
<発表技能>
○達成感 充実感、他者からの反応、つまらなさ
○不安感 他者からの評価、間違いへの不安、気楽さ
○効果 役立ち度

学習環境・習慣に関する要因
<受容技能>
○やりやすさ 教材選択の難しさ、継続の難しさ 面倒さ、慣れ・習慣のなさ
<発表技能>
○やりやすさ やりやすさ、面倒さ、慣れ・習慣のなさ

(2) 第2調査では、得られたデータから、まず学習者の属性についての分析を行った。学習志向に関する26項目の回答結果に基づいて因子分析（重み付けなし最小二乗法、プロマックス回転）を行い、因子抽出を試みた。その結果、4つの因子を得ることができたため、それぞれを「熟考因子」「実践因子」「論理因子」「規則因子」と名付け、本調査で得られた学習志向型とした。そして、それぞれの因子と学習方法への認知的評価の関わりと調べるために、それぞれの因子の因子得点の平均値と標準偏差を用いて、平均値+0.5標準偏差より上を上位群、平均値±0.5標準偏差内を中位群、平均値-0.5標準偏差を下位群とした。次に、それぞれの学習方法ごとに7項目設定していた認知的評価のうち「やりたい」を除いた6項目の回答結果に基づいて因子分析（重み付けなし最小二乗法、プロマックス回転）を行い、因子抽出を試みた。分析の結果、2つの因子が抽出され、それぞれを「やれそう因子」「役立ちそう因子」と名付けた。それから、学習志向性と学習方法に対する学習意欲の関係を調べるために、学習志向の分析で抽出された4つの因子の3群ごとに比較を行った。4因子の3群間で学習方法に対する認知的評価の影響に違いがないかを「やりたい」の得点を従属変数、「やれそう因子」「役立ちそう因子」の因子得点を独立変数として重回帰分析を行い比較し

た。特に各学習志向型の特徴を分かりやすく検討するために、上位群と下位群を比較した表を以下に示す（表3、表4）

表3 学習志向型ごとの認知的評価の学習意欲への影響（リスニング）

学習志向		R2乗	やれそう	役立ちそう
熟考型	上位	.676	.613	.282
	下位	.670	.708	.167
実践型	上位	.674	.423	.486
	下位	.639	.625	.269
論理型	上位	.595	.483	.382
	下位	.720	.711	.207
規則型	上位	.629	.580	.304
	下位	.728	.685	.251

※ R2乗は調整済み決定係数を表す。

表4 学習志向型ごとの認知的評価の学習意欲への影響（スピーキング）

学習志向		R2乗	やれそう	役立ちそう
熟考型	上位	.593	.378	.484
	下位	.571	.613	.206
実践型	上位	.572	.429	.392
	下位	.579	.513	.332
論理型	上位	.472	.299	.470
	下位	.674	.603	.260
規則型	上位	.533	.392	.432
	下位	.587	.769	---

※ R2乗は調整済み決定係数を表す。

それぞれの学習志向型間を比べてみると、リスニングでは、実践型とそれ以外では傾向が異なっていることが分かる。すなわち、実践型の上位群は「やれそう」と「役立ちそう」がほぼ同程度の影響力を示しているのに対して、下位群は「役立ちそう」よりも「やれそう」の方が影響力が強いことが示されている一方、実践型以外の学習志向については、総じて上位群の方が下位群よりも「役立ちそう」の影響力が強いことが示されている。またスピーキングについても実践型とそれ以外の学習志向型の間傾向の違いが示された。すなわち、熟考型、論理型、規則型において「やれそう」よりも「役立ちそう」の影響が強いことが示される一方で、実践型については、上位群は「やれそう」の影響力がやや弱い、上位群、下位群共に「やれそう」の方が「役立ちそう」よりも強い影響力を持っていることが示された。

これらの結果をまとめると、実践型とそれ以外の3種類の学習志向型は異なる動きをしていることから、実践を通して学習することを好むかどうかは学習方法に対する学習意欲に関係する大きな特徴のひとつである可

能性があることが示されたと言える。ただし、それぞれの学習志向の上位群と下位群の間で英語学習に対する評価に関する項目で差が検出されているため、上位群と下位群の間の違いが学習志向のみの影響であるかどうかは本調査では明確になったとは言えず、今後の調査が必要であると考えられた。

(3) 第3調査では、技能別に、学習志向に関する特性ごとの英語学習に対する意識、および学習方法に対する認知的評価の平均値を検定し、それぞれの間の相関係数を算出した。その結果、それぞれの技能において影響が見られた特性は、リスニングが特性2、特性3、特性4、特性7、特性9、スピーキングが特性2、特性3、特性4、特性6、特性8であった。各項目の内容と5%水準で有意差が示された項目を表5に示す。

表5 影響のあった特性の項目の内容と差のあった項目

特性2
A 間違いを少なくしてから実際に使いたい
B 実際に使いながら間違いを直していきたい
○リスニング「CD付問題集」 「やれそう」 A < B
○スピーキング「課外の英会話活動に参加」 「やりたい」 A < B 「やれそう」 A < B
特性3
A 興味がなくても役立つことを勉強したい
B 自分の興味のあることを中心に勉強したい
○リスニング「CD付問題集」 「役立ちそう」 A > B
○スピーキング「音読」 「やりたい」 A > B
特性4
A 勉強は楽しくやりたい
B 勉強に楽しさは求めない
○リスニング「映画やドラマなどの視聴」 「やりたい」 A > B 「役立ちそう」 A > B
○スピーキング「課外の英会話活動に参加」 「やりたい」 A > B 「役立ちそう」 A > B
特性6
A 勉強中なら人前で間違えることはあまり気にならない
B できる限り人前で間違えることは避けたい
○スピーキング「課外の英会話活動に参加」 「やりたい」 A > B 「やれそう」 A > B
特性7
A 計画的に時間を決めて勉強をするほうだ
B やる気がある時に勉強するほうだ
○リスニング「CD付問題集」 「役立ちそう」 A > B

特性8
A どちらかと言うと自分に厳しい方だ
B どちらかと言うと自分に甘い方だ
○スピーキング「音読」 「役立ちそう」 A > B
特性9
A 教材は決められているほうがよい
B 教材は自分で選べるほうがよい
○リスニング「映画やドラマなどの視聴」 「やりたい」 A > B

分析結果をまとめると、「やりたい」という気持ちに直接的な影響が見られたのは、リスニングでは特性4、特性9であり、スピーキングでは、特性2、特性3、特性4、特性6であった。すなわちリスニングにおいては、映画やドラマなど興味を持ちやすい学習方法については、楽しさに関係する特性、教材選択に関係する特性の影響が見られ、スピーキングにおいては、他者のいる学習方法については間違いに関する特性と楽しさに関する特性が影響しており、他者のいない学習方法については効果に関する特性が影響していることが示された。

「やれそう」という気持ちに影響している特性は、リスニングでは、CD付問題集を用いた学習方法に対する特性2のみで、Aの「間違いを少なくしてから実際に使いたい」と答えた学習者の方が問題集をよりやれそうにないと答える結果となった。この理由としては、特性2については、不安感に関する項目であるため、AB間で技能に対する自信や学習を好きかどうかについての評価も異なっており、そのため不安感というよりも学習を好まない結果、興味を持っていないものをやれそうにないと判断した可能性が考えられた。一方、スピーキングの「やれそう」については、他者のいる学習方法については間違いと実践に関する特性2、特性6においてAB間に差が示されており、不安感が強い学習者は相手のいる学習方法をやれそうにないと感じることを示されていると言える。

「役立ちそう」の項目については、リスニングでは興味と効果に関する特性が映画などの学習方法に、計画性に関する特性が問題集を用いた学習方法に影響を及ぼしており、特に問題集等ではコツコツ学習できるかどうかによって効果がありそうかどうかを判断していることが示された。スピーキングにおいては、相手のいる学習方法に対しては楽しさを重視する学習者の方が役立つと考えており、音読のような相手のいない学習方法に対しては、自分自身を律して学習できると考えている学習者の方が役立ちそうだと考えていることが示された。

調査3では、自分が望む形で教師の関わりがあった場合に「やりたい」「やれそう」「役

立ちそう」がどのように変化するかも調査、分析した。図1はリスニング、図2はスピーキングの「やりたい」「やれそう」「役立ちそう」の平均値の差である。これらのグラフからも分かるように、教師の関わり後に数値の変化が大きいの「やれそう」の項目であることが分かる。その一方で、「役立ちそう」はそれほど差を示していないことから、教師の関わりが「やれそう」という気持ちに影響を与え、その結果「やりたい」という気持ちに変化が見られた可能性が示唆された。

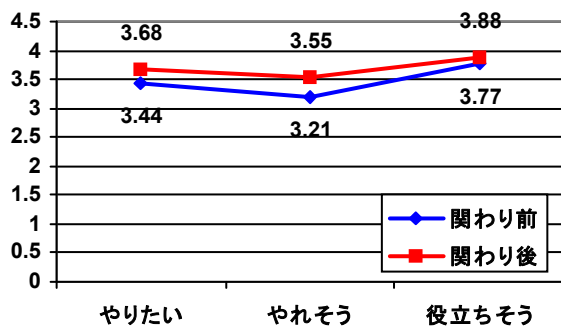


図1 教員の関わり前後の変化 (L)

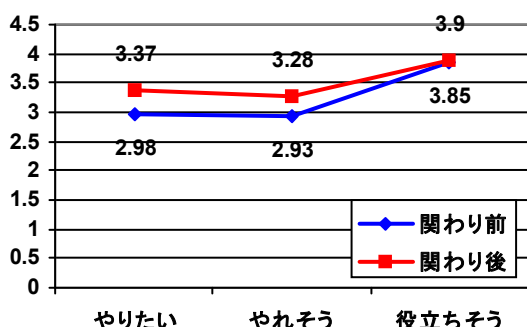


図2 教員の関わり前後の変化 (S)

(4) 以上のような主要な結果から、以下のような、いくつかの教育的示唆を得られた。

- ① 教師が学生に学習方法を薦める際には、その学習方法をやれそうかどうか、役立ちそうかどうかを重視されていることに留意する必要がある。つまり、やれそうにないと思われた学習方法はどれほど役立ちそうであろうと学生はあまりやりたがらず、またどんなにやれそうであっても、効果が期待できない学習方法もあまりやる気を起こさせないのである。
- ② 学生がある学習方法をやりたいと思うかどうかには、その学生の目標や客観的英語力だけでなく、他者からの評価に対してどのような気持ちを持っているか、楽しさと効果のどちらに重点を置いているかなどが関係している。また学習方法をやれそうと思えるかどうかには、受容技能であれば興味を持てるか、発表技能であれば不安感と充実感が大

きな要因と考えられるため、例えば自分の学力に不安のある学生に対しては、段階を示してまずある程度一人で学習してからコミュニケーションにつながる学習を薦めるなどの工夫が必要であることが示された。また、役立ちそうだと思うかどうかには、その学生が計画性を持って学習するタイプかどうかにも影響していると考えられる。

③ 教師の働きかけは主に学習方法をやれそうかどうかという気持ちに影響していることが示されたが、もちろん教師の関わりに関しては、例えば学習方法がどのように役立つのかを説明するなど、他の要因へ影響を及ぼすことも十分に可能であるため、あくまで実施に対する教師の働きかけに限定した結果と考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 池上真人、青木信之、渡辺智恵、学習意欲に働きかける学習方法の与え方に関する研究—学習意欲に影響を及ぼす要因の検討—、中国地区英語教育学会研究紀要、査読有、第41号、2011、41-50.
- ② 池上真人、自学習の学習方法に対するやる気に影響を与える学習者要因に関する研究—スピーキングの学習方法に焦点を当てて—、松山大学論集、査読無、第23巻4号、印刷中.

[学会発表] (計2件)

- ① 池上真人、青木信之、渡辺智恵、学習意欲に働きかける学習方法の与え方に関する研究—質的研究による学習意欲に影響する要因の検討—、第41回中国地区英語教育学会、2010年6月27日、広島大学.
- ② 池上真人、青木信之、渡辺智恵、学習意欲に働きかける学習方法の与え方に関する研究、第36回全国英語教育学会大阪研究大会、2010年8月7日、関西大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池上 真人 (IKEGAMI MASATO)
松山大学・経営学部・准教授
研究者番号：60420759

(2) 研究分担者

青木 信之 (AOKI NOBUYUKI)
広島市立大学・国際学部・教授
研究者番号：80202472
渡辺 智恵 (WATANABE TOMOE)
広島市立大学・国際学部・教授
研究者番号：802753396